

IIBC 高校生英語エッセイコンテスト

IIBC ENGLISH ESSAY CONTEST FOR HIGH SCHOOL STUDENTS



「IIBC 高校生英語エッセイコンテスト」は
TOEIC® Programの運営団体による
高校生のためのコンテストです。
「英語は苦手だから……」と構えず
まずはパンフレットを開いてみてください。

CONTENTS

受賞者インタビュー①

「違いをなくすのではなく、違いを超えたい」

受賞者インタビュー②

「一番簡単な言葉が、一番いい言葉」

受賞者に聞きました！

英語エッセイ執筆のコツ

募集テーマ

つながる心、
広がる世界

コミュニケーションを通じた響きあい



英語は、広く世界に伝えるツール。
大切なのは、「何を」伝えたいか。

IIBC 高校生英語エッセイコンテストは
2009年に、TOEIC®テスト実施30周年を記念して設立されました。

「高校生の皆さんに、自分の考えや意見を英語で発信する機会をつくりたい」
そんな想いから始まったのが、このコンテストです。

募集テーマは
「つながる心、広がる世界 ～コミュニケーションを通じた響きあい～」

私たちは多様な価値観に触れながら日々を過ごしています。
文化、バックグラウンド、考え方……
様々な違いをコミュニケーションを通じて認め理解することで、心と心がつながる。
つながることで世界が広がっていく。
私たちIIBCは、これをコミュニケーションがもたらす響きあいと考えます。

きっと、異なる部分が大きいほど、
つながった瞬間に広がる世界は大きく感じられるでしょう。

特別な経験ではなく、日常にある身近なエピソードで構いません。
皆さんが得た気づきや学びを英語というツールを使ってエッセイにしてください。

※ TOEIC®テスト = 現在の TOEIC® Listening & Reading Test

県内屈指の進学校が考えるコンテストの価値

「時代が本当に必要とする英語力を養える機会」

WHAT IS THE VALUE OF THE CONTEST?

受験を控える夏に 3年生全員が挑戦した理由

—— 県立千葉高等学校は、3年生のほぼ全員、約 250 名が本コンテストに参加。受験を控える夏の時期に、英語の授業の 3 時間分を使って取り組んでくださったとうかがいました。

田中航祐先生（以下、田中） 高校生が 500 ～ 700 語という長い英文を書く機会は、授業や受験勉強の中ではそうあるものではありません。しかし、グローバル時代における生徒の未来を考えると、自分の考えを世界中の人々が理解できる形で伝える力は必要不可欠。大学に進学してから、社会に出てから、近い将来に必ず「高校時代にやっておいて良かった」と思える経験になると考え、参加を決めました。

渡邊衣さん（以下、渡邊） 帰国子女でもなく留学経験もない私は、英語は正直苦手で「受験科目」の 1 つという認識でしたが、今回エッセイを書いてみて、「そもそも英語って『科目』じゃなくて、人と繋がるための『手段』なんだ」と捉え直すことができました。英語への向き合い方がポジティブになる、大切な気づきだと感じています。

田中 もちろん「大学入試の英語に繋がらない」わけでもありません。入試でも 100 語以上の英文を書くテストは多くありますし、自分が英文を書くことで、他人が書いた英文を読解する力が養われる側面もある。このエッセイコンテストへの参加は、総合的な英語力を高める機会になると考えています。

自分の体験を、素直な言葉で 誰もが参加できるコンテスト

——「つながる心、広がる世界 ～コミュニケーションを通じた響きあい～」というテーマにつ

いてはいかがでしたか？

田中 多様性をどう解釈し、尊重するかが重要な今、高校生のうちから向き合うべきテーマだと感じました。国境を超えた交流でなくても、日常生活を丁寧に見れば、価値観の違いによる衝突は至るところにあるため、誰もが取り組めるテーマです。実際に約 250 名分のエッセイを読んで、生徒一人ひとりが自分の体験を振り返り、掘り下げる貴重な機会になっていたと感じます。母語ではないからこそ、シンプルな言葉で、ストレートな想いを表現できた生徒も多かったですね。

渡邊 私は障がいを持つ従姉妹との交流で感じた学びや反省をエッセイにしました。英語のテストを運営する団体が開催するコンテストなので、海外の人との交流について書いた方が評価されると思っていたため、受賞できたことは本当に驚きでした。エッセイを書くことで「コミュニケーションを通じた響き合い」は、言語以外の方法でも可能だということを自分の中で整理でき、受賞したことで、その気付きをいろいろな方に読んでいただけたことが嬉しいです。

—— 今後について教えてください。

田中 これからも学校として、コンテストへの参加を続けられたらと思っています。今回渡邊さんの受賞によって、海外経験がなくても評価されることが証明されたので、多くの生徒たちのモチベーションも高まると感じています。教師としても、エッセイを通して生徒それぞれの物事に対する見方や考え方を知る機会なので、楽しみたいです。

渡邊 私は医学部に進学することが決まり、小児科医を目指しています。エッセイコンテストに参加したことで自分の考えを伝えることに少し自信を持てました。これからも様々な立場の人のことを考えながら、社会に貢献できるようになりたいと思っています。

県立千葉高等学校 主幹教諭 田中 航祐先生

専門科目は英語。長期的視点で必要な英語力を育てることを信念に、大学受験だけでなく、その先の人生を見据えた英語指導を行う

県立千葉高等学校 3 年生 渡邊 衣さん

障がいを持つ従姉妹とのコミュニケーションについて執筆したエッセイ『What my little cousin with a disability taught me』で、第 16 回特別賞を受賞。小児科医を目指し、2025 年 4 月より医学部に進学

渡邊さんの
エッセイ全文は
こちらから



https://iibc.me/essay_kinu

受賞者インタビュー①

等身大のエピソードで最優秀賞

「違いをなくすのではなく、
違いを超えたい」

さいたま市立
大宮国際中等教育学校5年
古賀 杏奈さん

小学生時代は英語は話せなかったが、
国際的なプログラムの多い現在の中
高一貫校に入学したことで英語力が
一気に飛躍。総合学習の授業の中で
「文化の違い」を研究中

「空港で名残惜しんでくれなかった……！」 アメリカの友人に対する小さな違和感

——古賀さんは、ホームステイ先のアメリカから帰るときに、空港で別れを惜しんでくれないアメリカの友人に対する「なんで!？」というモヤモヤと向き合い、エッセイを執筆。
「募集要項を見てすぐに、このエピソードが思い浮かびました(笑)。違いに悩まされたあと、それを乗り越えることで本当の意味で心と心が繋がって、一気に世界が広がる。まさに『つながる心、広がる世界』を体験したばかりだったので『私の感じたこと、そのものだ!』と。ただ、このエピソードはテーマに対しスケールが小さすぎるかも……と悩みもしました。文化の違いによって起こる戦争や差別のような大きな問題について書くべきではないかと。でも正直、今の自分はその問題に直結する個人的な経験や強い感情を持っていないため、『私の等身大のエピソードだって、文化の違いによって生まれる大きな問題とどこかで繋がっているはず』と思い直しました」

「17歳の私の考え」を ありのままに

——エッセイの執筆で大切にすることは？
「読んだ方が私の思考を追体験できるような形にできたらと思いました。何が起って、どこに違和感を覚え、どんなリサーチをした結果、その気づきに至ったのか。『ネットで検索したらこんな意見が出てきた』という、自分以外の

声も含めて丁寧に書くことで、私の悩みや葛藤をリアルに表現できたらと考えました。『これは17歳の今の私が出した答えで、数年後には考えが変わるかもしれない』というようなニュアンスまで含めて、ありのままの想いが伝えられていたら嬉しいです」

——文章表現でこだわった点は？
「過去に英語のスピーチコンテストにも出たことがあり、その台本を書く際に学んだことがあって。それは、日本語の作文では風景描写や会話文を入れると物語っぽくなりすぎるため避けがちだけど、英語の作文においてはそこをあまり気にしないで良いということ。今回も、風景描写や会話文を取り入れて、英語の表現の豊かさを活かそうと思いました」

——結果、330作品の頂点に。
「受賞を知った日は家族で驚きながら、夜も先生にチャットをして『本当なの?』と確認したりしていました(笑)。やはり扱ったトピックが小さいことで『自分では納得できるエッセイだけど、受賞には向いていないかも』と思っていたので、信じられない気持ちでした。ただ、受賞できずとも、自分の体験と向き合い、言葉にできたことの満足感もあったので、書いて良かったと感じていたと思います」

——今後の展望を教えてください。
「文化を研究できる大学に進学して、その後は英語や第二外国語を使って文章を書く仕事に就けたらと想像しています。国ごと、地域ごと、家族ごとの様々な文化に触れながら、あらゆる違いに納得できるマインドセットを持つことが、人生を通した目標です」

第16回 最優秀賞受賞

Beyond the differences

“Clear sky, fresh air and a nice smell of morning coffee. Everything was too perfect to say goodbye to Cathy, my host sister.”

(受賞作品『Beyond the differences』より抜粋)

古賀さんの
エッセイ全文は
こちらから



https://iibc.me/essay_anna

受賞者インタビュー②

エッセイでなく、手紙を書くつもりで。

「一番簡単な言葉が、
一番いい言葉」

聖学院高等学校1年生

野中 茂壮さん

家族の転勤により幼少期からベトナムへ。その後、ミャンマーで暮らし始めるが、クーデターにより帰国。「クーデターが起こる前のミャンマーの魅力」を伝えるため、グローバルユース国連大使など様々な活動に励む

人生のターニングポイントを エッセイのトピックに

——下半身がつながって生まれた、ベトナムの双子「ベトちゃんドクちゃん」。日本でも教科書や絵本を通して知られていますが、野中さんは大人になった「ドクさん」にベトナムで偶然出会い、その経験を題材にエッセイを執筆されました。

「中学時代から参加したいと思っていたこのコンテストで、僕の人生のターニングポイントについて振り返りたいと考えました。小学生のときに彼と出会って僕は大きな影響を受けたのに、高校生になるまでその経験を言葉にして整理する時間がつくれませんでした。だからエッセイを書くことで、僕が彼とのコミュニケーションを通して受けたと思ったものを言語化できたらと。溢れ出てくる想いをまとめることで、自分の原点を確認する機会になりました」

——タイトル『Just a Man』に込めた想いは？

「このタイトルは、エッセイを書き始める前から決まっていた。ドクさんは世の中では『結合双生児の弟』『障がい者』として認知されているかもしれませんが、僕にとっては『ドクさん』という名前をもつ、“ただのひとりの人間”でしかない。それを一番強調したいと思いました。ドクさんは片足がないけど、助けてもらったのは僕。きっと人は誰もりが何かしら足りない部分があって、だからこそ助け合える。今回のエッセイを書き切って、そういうことにも気づくことができました」

——構成や文章表現でこだわった点を教えてください。

ださい。

「実は今回の執筆をするにあたり、エッセイのセオリーや審査員の方々の視点などは意識しませんでした。エッセイというよりは『ドクさんへの手紙』を書こうというつもりで、個人に向けて素直な気持ちを、かっこつけない言葉で綴りました。英語という制約があったからこそ、余計な表現やボキャブラリーを使わず、ストレートに書けた面もあると思います。一番簡単な言葉が、一番いい言葉になることもあるのかなと今は感じています」

ベトナム大使館経由で 本人からも連絡が！

——受賞を知ったときの気持ちは？

「まずはドクさんとの出会いに対する感謝。そして応募するに当たって手続きなどをサポートしてくださった先生たちへの感謝の気持ちが込み上げました。受賞の報告はドクさんに最初にしたいと思い、ベトナム大使館を通して連絡したところ、ドクさんからお返事と当時の写真もいただきました。覚えてもらえていたこととても嬉しかったです」

——今後の展望を教えてください。

「英語の魅力は、世界中の多くの人にメッセージを届けられることです。現在、僕は小学生時代を過ごしたミャンマーの魅力を国内外に伝える活動をしています。また、『障壁の中で人々が施し合いながら生きていく方法』について学びたいと考えています。今後も英語を活かして様々なことに取り組んでいきたいです」

第16回 優良賞受賞

Just a Man

“Well, even in the cinema, you’re just a man to me. But hey, because of you, I can walk on these two legs today, Duc.”

(受賞作品『Just a Man』より抜粋)

野中さんの
エッセイ全文は
こちらから



https://iibc.me/essay_shigeo

歴代受賞者が、審査員として参加中！

大学生の先輩が語る「受賞後」

東京大学
法学部（4年）
正岡 優一さん



小学生時代を過ごしたベルギーでの異文化体験と、1970年代の米中国交正常化について書いたエッセイ『The Little Ball Moves the Big Ball』で第10回（2018年度）最優秀賞を受賞

慶應義塾大学
法学部（1年）
矢野 絵理奈さん



中学時代のアメリカ留学を振り返り、固定概念に捉われず正直な意見を伝える大切さを書いたエッセイ『Face the Discomfort』で第13回（2021年度）最優秀賞・日米協会会長賞・アルムナイ特別賞を受賞

立命館アジア太平洋大学
国際経営学部（1年）
横田 卓己さん



中学時代のサッカーのドイツ遠征で、国籍や人種にとらわれない視野を持つことの大切さに気づいた経験を書いたエッセイ『Football More than a Game』で第14回（2022年度）特別賞を受賞

受賞から数年。
未来はどう広がった？

——過去に本コンテストで受賞された皆さん。「アルムナイ審査員」という形でまたコンテストに関わろうと思った理由は？

正岡優一さん（以下、正岡） 僕は高校1年生のときに最優秀賞を受賞し、副賞としてイギリスに2週間留学をさせていただきました。その経験が今の自分や進路に大きな影響を与えてくれたものとなったので、大学最後の年に、改めてこのコンテストに関わることで恩返しができたらと思い応募しました。

矢野絵理奈さん（以下、矢野） 私もち高校1年生のときに受賞したのですが、表彰式で当時アルムナイ審査員をされていた大学生と交流する機会をいただき、様々な角度で刺激を受けました。次は自分が高校生の皆さんをインスパイアする側に、と考えて参加しました。

横田卓己さん（以下、横田） 僕はもともと英語が苦手でしたが、受賞をきっかけに好きになりました。あまり勉強はせず、サッカーばかりしてきた自分が審査員としてコンテストに関わることで、自分と同じような高校生たちの応募のハードルを下げられるのではないかと、思い参加を決めました。

——受賞したことで、その後の進路や活動など

にどのような影響がありましたか？

正岡 外交に触れたエッセイが評価されたことで「国際的なフィールドで仕事をしたい」という思いが強まり、卒業後の進路選択にも繋がりました。自分は幼少期から現在まで恵まれた環境にいたと感じており、自分が得られたものを、これからは国の制度や基盤をつくる仕事を通して社会に還元していけたらと考えています。

矢野 日米協会会長賞をいただいたことをきっかけに、大学生になってからは日米協会でインターンをしています。日米関係に関する高校生クイズ大会の運営など、様々な形で、もともと興味があった日米関係についての理解を深めることができています。

横田 英語が苦手だった僕は、受賞で自信を得たのもありますが、それに見合うようにもっと英語力を伸ばそうと努力するようになりました。将来は、大好きなサッカーに関わる仕事をしたいと思っていますが、以前なら国内しか視野になかったのが、世界に出ることへの躊躇がなくなって、今は国外にも視野を広げて活動していきたいと考えています。

独自の視点・感性を活かした
「素直な発見と学び」を評価

——審査員として応募作品を読み、どのような

ことを感じましたか？

正岡 皆さんの多種多様なエッセイを読んで改めて感じたのは、「異文化コミュニケーション」というのは、様々な形で身近にあるということ。国境や言語を超えたコミュニケーション以外を取り上げた作品には、日常での気づきを詳細に言語化されたものが多く、刺激をもらいました。
矢野 宗教だったり LGBTQだったり、幅広いトピックを高校生ならではの豊かな感性で捉えたエッセイを読むのは楽しい時間でした。上手に文章を書くことより、素直に思ったことを書くことが大切で、結果的にそれがユニークなエッセイとして高い評価を受けるんだらうということも感じました。

横田 最終選考まで残っていた作品の書き手は、小さな出来事や誰かのちょっとした一言から学びを得ることがうまい人たちですね。そういう人たちってエッセイに限らず、これから社会で活躍していく人たちなんだろうな……と審査する立場になって客観的に思いました。僕もそういう姿勢を取り入れていきたいと感じました。

——最後に、応募する高校生にメッセージを。

正岡 たとえ受賞できなくても、参加するだけで自分自身や世の中についての発見を得られるコンテストだと思います。ぜひ、世界を広げるための一歩として取り組んでみてください。

受賞者に聞きました！

英	語	エ	ッ	セ	イ
執	筆	の	コ	ツ	

2

起承転結のある構成で、
ストーリーをつくろう。

エッセイを興味深く読んでもらうためには、起承転結をつくる「構成」も大切。自分の気付き、行動、学び、成長をどのような順序で並べ、どのようなストーリーとして伝えるか。それを考えておくと、500～700ワードを書き上げやすくなると思います。

第10回最優秀賞 正岡優一さん

5

使える語彙が少ない英語だからこそ、
強い表現ができることも。

センシティブな内容を扱うときなど、日本語だと遠回しな表現になってしまいがち。使える語彙が少ない外国語で書くからこそ生まれる、ストレートな表現の強さが魅力になることもあると思います。

第13回最優秀賞 矢野絵理奈さん

1

小さな出来事から、
どれだけ深い学びを発見するか

自分の身の周りで起こったちょっとした出来事から世界中の人間関係に当てはまるような深い発見ができると、読んでいる人も面白く感じるはず。国と国の関係や宗教の話など、スケールの大きなトピックと向き合うときも、考えるヒントは身近にあると思います。

第14回特別賞 横田卓己さん

3

書き出しの一文で引き込めるように。

読みたくなるエッセイにするために意識したのは、書き出しの一文を読み手が「どういうこと？」と気になるようなフレーズにすること。私の場合は、“My cousin’s arms are her mouth.” から始めました。

第16回特別賞 渡邉衣さん

4

風景描写を入れると、
英語のエッセイっぽくなるかも？

海外の英語エッセイを自分なりに研究したところ、書き手の心情が伝わるような風景描写が入っていることが多いように感じ、私も挑戦しました。英語ならではの表現で自分の考えを伝えられたと思います。

第16回最優秀賞 古賀杏奈さん

6

定石に捉われず、自分のスタイルも大切に。

素直な気持ちを表現したくて、大勢の読み手を意識するのではなく、一人に向けた手紙というつもりで書きました。応募前に家族からは「エッセイの定石から外れているのでは？」と心配されましたが、自分のスタイルを大切にしました。

第16回優良賞 野中茂壮さん

審査員からの メッセージ

東京国際大学教授・立教大学名誉教授
松本 茂さん



「高校生のうちにエッセイを書く練習を積むことはとても有意義なことです。論理的なエッセイの書き方が身につけば、大学入試や大学の講義でも十分に力を発揮できます。社会に出て論理的思考力が求められます。皆さんの素晴らしい作品に出会えることを楽しみにしています」

一般社団法人日米協会会長
藤崎 一郎さん



「審査においては、得られた経験や学びを実践に繋げるコミットがされているかを大切にしています。皆さんのような若い世代が、世界中に仲間を増やし、社会の発展や国際交流に貢献されることを大いに期待しています」

募集要項 APPLICATION DETAILS

テーマ	つながる心、広がる世界 ～コミュニケーションを通じた響きあい～
応募資格	英語を母語としない、日本国内に所在する高等学校・高等専門学校の1～3年生
応募作品	●テーマに沿って、コミュニケーションを通じて学んだことや気づきを英語でエッセイにしてください。エッセイのタイトルは自由です。 ●作品の語数が【個人部門】500～700語、【団体部門】400～700語を満たしていること ●作品規定※を満たしていること（※右QRコードよりアクセス） https://iibc.me/essay_format_leaf_2025 
賞	【個人部門】 審査で選ばれた作品に以下の賞を授与します。 ●最優秀賞・優秀賞・優良賞（各1名）、特別賞（5名） 以下の観点で優れた作品を選考します。 [構成／分析／例示／創作性／テーマとの整合性／文法・語句] ●日米協会会長賞（3名） 一般社団法人日米協会が国際理解や国際交流の観点で選考します。 ●アルムナイ審査員特別賞（1名） 過去の受賞者がアルムナイ審査員として独自の基準で選考します。 【団体部門】 20作品以上を応募した学校に奨励賞を授与します。※規定外の作品を除く
賞品・特典	●最優秀賞・優秀賞・優良賞の受賞者に、PCまたはタブレットを贈呈 ●個人部門の全受賞者に、表彰状・トロフィー（またはメダル）のほか、英語学習プログラム参加およびTOEIC®Listening & Reading公開テスト受験（1回）を贈呈 ●両部門の全応募作品に、英文ライティング講師からのフィードバックを付けて返却
応募方法	個人部門・団体部門とも <u>学校を通じての応募</u> となります。なお、個人部門の応募は、1校につき3作品まで
応募期間	例年、学校からの応募受付期間は「7月～9月初旬」です。 <u>校内の提出期限は、指導教員に確認してください。</u>
審査結果	例年、10月下旬にWEBサイトで発表し、11月に東京都内会場にて表彰式を開催します。

